Report

調査報告

ミャンマーの仏教遺跡訪問記
―バガンで見た信仰―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科研究員　市岡　聡

はじめに

仏教は大乗仏教と上座部仏教に大別できる。日本や中国等で信仰されているのは大乗仏教であり、主に東南アジアで信仰されているのが上座部仏教であるといわれる。調査報告をするミャンマーは上座部仏教の国とされていて、私は日本と異なる仏教信仰の様子や、荘厳華麗な仏塔や寺院を目の当たりにした。他方、大乗仏教の思想に淵源があるようなものも目撃した。さらに、ミャンマーでは仏教信仰以外に精霊や神への信仰が共存していることもわかった。

今回、バガン、バゴー、ヤンゴンを訪れたが、バガンは二〇一六年の夏に世界的に有名になった街である。二〇一六年八月二四日夕方、マグニチュード六・八の大地震があった。震源地はバガンに近く、二〇〇ヶ所近くの仏塔が一部崩壊などの被害を受けた。私がバガンを訪れたのはこの地震から十六日後の二〇一六年九月九日であった。

本調査報告では、バガンの仏塔や寺院で見ることのできた信仰の様子と、日本の信仰との共通点と相違点、地震の被害状況について紹介したい。なお、国名については、国連や日本国外務省が「ミャンマー」を用いているので、本報告でも「ビルマ」ではなく「ミャンマー」を用いたい。また、ミャンマー国内の地名は現時点で使用されている地名を用い、「仏塔」は「パゴダ（Pagoda）」ではなく、ミャンマー語の「パヤー（Phaya）」を用いる。

1．ミャンマー仏教の特徴

ミャンマーは九〇％が仏教徒であるとされる。現地に赴くと、確かに仏教徒が多いと感じられる。しかし、仏教信仰のほかに「ナッ」や「ボーボージー」と呼ばれる精霊等の神への信仰も同居していることがわかる。日本でも仏や神にお参りをするから、このことに対して何ら違和感を感じない。さらに、仏塔の守護として神が祀られる場合もあり[1]、中国や日本の「伽藍神」を彷彿とさせるものもある。

ミャンマーの仏塔・寺院にある仏像の多くは釈迦像か過去四仏（東方はカクタン Kakusanndha〈倶留孫仏〉、南方はコーナゴォン Konagomana〈倶那含牟尼仏〉、西方はカタパ Kassapa〈迦葉仏〉、北方はゴータマ Gautama〈釈迦仏〉）である。過去七仏は日本でも耳にするが、過去四仏というのはあまり聞かない。仏像は坐像と立像ともにあり、坐像の多くは右手の指先を地面に付ける「降魔印」である。印相は坐像・立像ともに一〇〇種類以上もの多種多様である。それぞれの印相には意味があり、例えば、説法印は安全を、施無畏印は悪いことをしないということを、裾を持つのは説法する前を意味している。

ミャンマーの仏塔・寺院では人々が仏に対し花と蝋燭と線香を手向ける姿を目にするが、花は美しくなるため、蝋燭は頭が良くなるため、線香は有名になるためという意味付がなされている。また、仏塔・寺院には鐘があり、脇に置かれた杵のような棒で三回叩くことになっている。鐘を撞くのは自分が仏塔・寺院に参

拝したという善行を知らせることを意味し、三回撞くのは一回目は天の神に、二回目は人々に、三回目は地獄に知らせることを意味する。このようにミャンマーでの仏に対する礼拝には意味付けがなされている場合が多い。

ミャンマーの男性は就学前に必ず出家する。今回の旅行では見ることができなかったが、出家する子供は昔の王の装束を着て、馬に乗って入寺する。寺で得度を済ませると、一週間から一〇日程度僧院で修行生活をする。また、就学後も学校では仏教を教える授業があるらしい。

このように、ミャンマーでは日常生活に仏教思想が浸透していて、人々は仏教を生活の規範とし、老若男女問わず多くの人々が仏塔・寺院に参拝する。そして、僧侶による説法にも真剣に耳を傾ける。ミャンマーでは仏教が身近で日常生活の中に溶け込んでいるのである。

2．バガンの仏教

バガン（Bagan）はエーヤワディー川（Ayeyarwaddy River）中流域にあり、古くから内陸交易の拠点だったが、一〇四四年にアノーヤター王がビルマ族による史上最初の統一王朝を開いてからは政治・経済の中心となった。

バガンでの仏塔・寺院の建設は、アノーヤター王がタトゥン国から連れてきた上座部僧シン・アラハンに帰依してから始まったという[2]。現在、仏塔・寺院は三〇〇〇以上あり、ボロブドゥール、アンコール・ワットと並び、三大仏教遺跡とされる。バガン王朝の支配者層にとって仏塔や寺院、僧院の建立は重要な信仰の発露だったので、彼らはこぞって仏塔や寺院、僧院を作り、土地や僧院奴隷を多く寄進した。これらの領地は非課税地であったため王朝財政を圧迫し、僧院奴隷の増加は労働力不足を招いた。その結果、バガン王朝は弱体化し、元寇に耐えることができず、一二九九年に滅亡する[3]。

バガンは年中乾燥した気候のため、古い仏塔や寺院が多く残っている。現在バガンにある仏塔・寺院は十一世紀から十三世紀までに建立されたものであり、新たに建立されたものはないらしい。遺跡保存に最適な気候だが、この地はたびたび地震に見舞われ、そのたびに仏塔・寺院は被害を受けている。

3．バガンの仏塔・寺院

今回、私がバガンで訪れた仏塔・寺院について見てみたい。

写真１　シュエシーゴン・パヤーの王の礼拝場所

写真２　水溜りに映る仏塔の先端

①シュエシィゴン・パヤー
(Shwezigon Phaya)

このパヤーはアノーヤター王が一〇六〇年に着手し、子のチャンスイッター王のときに完成した。塔身はまばゆいばかりの金色で、見る者を圧倒する。パヤー壁面には多くのジャータカ（仏伝）がレリーフされ、境内には三十七ものナッが祀られている[4]。

このパヤーには特別な場所がある。そこには小さな水溜り【写真1、2】があり、参拝者たちはそこで足を止め、その水溜りを見入っている。ここは、重い冠のせいで塔の先端まで見通せない王が水溜りに映った塔の先端を見て礼拝するための場所だそうである。

また、この水溜りのそばには王が乗る白馬の像がある。人々は自分の悪いところと同じ部分を撫でると悪いところが治ると信じているが、これは日本でもよく目にする信仰の光景である。

②アーナンダ・パヤー
(Ananda Phaya)

チャンセッター王が一〇九一年に建立したバガンで最高の建築芸術とされる巨大なパヤーである。

参拝者を仏塔へと導く渡り廊下の梁間には多くの絵が描かれていて、中には地獄を想起させる絵が含まれており、写真【写真3】は釜茹での場面である。ミャンマーには輪廻の思想があり、来世には三十一もの段階があるとされ[5]、ミャンマーに地獄の思想があることがわかる。

写真３　釜茹の地獄絵

パヤー内部には四方に巨大な仏像があるが、特に南北の仏は創建当時の木像である。南の仏は高さ九・五米の立像で、近くから見ると厳しい表情だが【写真4】、遠ざかると笑みをたたえた穏やかな表情になる【写真5】。この表情の変化は、仏像の近くで拝む王は、良い政治を行なうよう戒めるために険しい表情になり、遠くから拝む民衆に対しては仏が慈悲をもって接するために穏やかな表情になるという。

写真４　アーナンダ・パヤーの南仏（近くから見たもの）

写真５アーナンダ・パヤーの南仏（遠くから見たもの）

堂内には仏伝のレリーフがあり、北廻廊には釈迦降誕をモチーフにしたレリーフがある。日本では釈迦は摩耶夫人の右腋から生まれたとするが、この彫刻では摩耶夫人の右腰から生まれている点は大変興味深い。

③タラバー門（Tarabha Gate）

ピンビャー王が八四九年バガン城築城のときに作った十二の門のうちの一つとされるが、現存するのはこの門だけである[6]。門の左右には「ミン」と「マハギリ」という名の「ナッ」（精霊のこと）が街の守護として祀られている【写真6】。日本の寺院でも、門には仁王がいて寺を守護しているが、これは寺外から邪悪なものが入らないよう外向きに安置されている。これに対しタラバー門のナッは内側に向いており、この向きからも街を守護するという意味を読み取ることができる。

写真6　タラバー門。
門の左右の小建物内にミンとマハギリがいる。

ミンとマハギリは兄妹である。彼らが在世中、王が怪力の兄に王位を奪われると考えて兄を殺してしまう。それに悲しんだ妹も死んでしまったが、バガンの人々はこの兄妹をナッの化身と信じ、街の守護とした。話柄は異なるが、兄妹が悲劇の末に神に祭り上げられるという発想は日本にもあり、例えば愛知県瀬戸市郊外にある「妻の神」も兄妹が悲劇の末に道祖神となるという話であって、兄妹の悲劇というモチーフがミャンマーと日本に見られるというのは興味深い。

④ナンパヤー（Nan-hpaya）

ナンパヤーは、一〇六七年にタトォン国王マヌーハが建立したマヌーハ・パヤーの隣にある。このパヤーは全て砂岩でできていて、今回は地震で入堂が禁止されていたので外観のみ拝見したが、精緻な彫刻が施されていて、小さいが立派な寺院である。

ナンパヤーの近くに写真のような公共の水飲み場がある【写真7】。この水飲み場は寄付されたものであり、ミャンマーにはいたるところに同様の水飲み場がある。水を利用することは人間にとって不可欠であり、水の恩恵を享受する場を設けることは、人々のためであって、まさしく「利他」の精神である。私は、利他は大乗仏教だけの特徴であると思っていたが、上座部仏教国とされるミャンマーで利他の発露を見、利他は通仏教的なものではないかと感じるようになった。別の見方をすると、仏教に利他の思想が通底しているから、仏教は広くアジアに受容され、今も信仰されているのではないだろうか。そして、ミャンマー仏教は上座部仏教であるというステレオタイプな見方で捉えることは一面的すぎるのかもしれないと考えるようになった。

写真7　公共の水飲み場

⑤ダマヤンヂー寺院
(Dhammayangyi Temple)

一一七〇年にナラトゥ王によって建立されたバガン最大の煉瓦による建築物であるが、地震によってたびたび被害を受けていて、一九七五年の地震で門の天井が崩落し、そこは今もなお再建されていない【写真8】。今回の地震でも被害があり、壊れた仏塔の一部がシートで覆われ、崩落した煉瓦がそのままになっている【写真9】。

ナラトゥは王位継承のため父の王と兄を殺し、第五代王として即位したが、彼は父兄殺害の罪滅ぼしのため、この寺院の建立を志す。殺生に対する滅罪なのか、殺父に対する滅罪なのかはわからないが、滅罪のために寺院を建立したというのは大変興味深い話である。

写真8　ダマヤンジー寺院の門。
1975年の地震以来、天井が修復されないまま。

写真9　2016年の地震で被害を受けたダマヤンジー寺院
（シートで覆われいる）

⑥ダマヤッズカ・パヤー
(Dhammayazika Phaya)

十二世紀にナラパシティツ王が建立したこの仏塔は、五角形であり、過去四仏と弥勒仏を安置している。弥勒仏は未来の釈迦（アレミリア・シャカ（将来仏））として北東の方角に安置されている。

私はここで、三枚一〇〇〇チャット（約一〇〇円）で金箔を購入し、少し高い位置に安置されている釈迦像に貼りつけた。数段の階段を昇って金箔を貼るのだが、この壇上には男性しか上ることができず、謂わば女人禁制の場となっている【写真10】。この他にもヤンゴンのシュエダゴン・パヤーにも女人禁制の場があるが[7]、人々はそれを受け入れ、禁制を犯さないようにしている。因みに、金箔は仏像の胸に貼ると穏やかに生活できるようになり、頭に貼ると経済的に豊かになり、腹に貼ると病気が治るとされる。

写真10　金箔を貼るダマヤッズカ・パヤーの仏像

⑦アッペイエレナ（アペヤダナ）・パヤー（Ape-yadana Phaya）

この寺院は比較的小さいが、内部には十一世紀の壁画が残されている。壁画に描かれたものを見ると、多面多臂の像がいくつか確認でき、ヒンドゥー教や密教の影響を見て取れる。そもそもバガン王朝時代には仏教

（大乗、密教、南伝）やヒンドゥー教が信仰されていたため[8]、このような像があっても不思議ではない。なお、ここも地震で建物の一部分が崩壊していた【写真11】。

写真11　アペヤダナ・パヤーの地震による被害

おわりに

本調査報告ではバガンにある仏塔や寺院等を中心に紹介した。紙数の関係でダマヤッズカ・パヤーをはじめとして紹介することができなかったところも多いが、いずれも特徴的で興味深い仏塔・寺院であった。私が今回参拝した仏塔や寺院はミャンマーの文化を代表する場所であるが、八月の地震による爪跡は深く、今後の修復が待たれるところである。【写真12・13】ミャンマーと日本は直線距離で四〇〇〇キロ以上離れているが、仏教というフィルターを通して日本との共通点を多く見ることができた。遠い国ではあるが、仏教を通してこれからより深く交流してゆくべきではなかろうか。

【写真12】ディヤダッタジ寺院の地震による被害

【写真13】ダマヤズッカ・パヤーの地震による被害

本調査報告ではバゴーとヤンゴンについて紹介することができなかったが、ヤンゴンのシュエダゴン・パヤーでは平安時代の日本にあった供養と同様の供養が現在もなされている。このことは詳しく紹介すべきものなので、バゴーとヤンゴンについては他日を期して報告したいと考えている。

［注］

(1) ダマヤッズカ・パヤーには神となった家来たちがパヤーを守っていると考えられている。

(2) この説は一八世紀前半のウー・カラー著『マハーヤーザウィンギー（大年代記）』以来の年代記から登場する話であり、その他の史料等からアノーヤター王の時代に上座部仏教一辺倒になったとは言えないという説もある（伊東利勝編『ミャンマー概説』（めこん、二〇一一年）。

(3) バガン王朝の滅亡をいつにするかは諸説あるが、ここでは根本敬『物語　ビルマの歴史　王朝時代から現代まで』（中央公論新社、二〇一四年）の記述に従う。

(4) 『仏塔と遺跡の町、バガン』（Asia House、二〇〇四年）。

(5) 田辺寿夫『ビルマ「発展」のなかの

人びと』（岩波書店、一九九六年）。

(6) 注(4)に同じ。

(7) シュエダゴン・パヤーには「PROHIBITED 1.FOREIGNERS 2.FEMALE AND 3.MALE OF 18YEARS ARE STRICTLY PROHIBITED TO GET THE UPPER PLATFORM OF SHWEDAGON PAGODA」とあり、女性だけでなく外国人や一八歳以下の男性もパヤーの上段に入ることが禁じられている。

(8) 伊東利勝「イラワジ川の世界」（石井米雄・桜井由躬編『東南アジア史Ⅰ大陸部』（山川出版社、一九九九年））。

［参考文献］

生野善應
『ビルマ佛教―その実態と修行―』
（大蔵出版、一九七五年）。

長澤和俊
『パゴダの国へ　ビルマ紀行』
（日本放送出版協会、一九七五年）。

池田正隆
『ビルマ仏教　その歴史と儀礼・信仰』
（法蔵館、一九九五年）。

田辺寿夫
『ビルマ「発展」のなかの人びと』
（岩波書店、一九九六年）。

石井米雄・桜井由躬編
『東南アジア史Ⅰ大陸部』
（山川出版社、一九九九年）。

伊東照司
『ビルマ仏教遺跡』
（柏書房、二〇〇三年）。

『仏塔と遺跡の町、バガン』
（Asia House、二〇〇四年）。

伊東利勝編
『ミャンマー概説』
（めこん、二〇一一年）。

根本敬
『物語　ビルマの歴史
王朝時代から現代まで』
（中央公論新社、二〇一四年）。